

宗教問答

問 仏教がだんだんと衰えてゆくのはどこに原因があるのだろうか。

答 それは仏教者に「信」がないからである。蓮如上人は「信もなくて、人に信をとられよ、とられよ、と申すは、われは物を持たずして人に物をとらすべきというの心なり、ひと承引あるべからず。」と仰せられた。これだけである。仏教で衣食しつつ信がない。したがって聞く気がない。聞法精進の願心がない。それよりほかに仏教荒廃の原因はあり得ない。

問 しかしほかに、たとえば時代の感覚を持って布教しないということもその原因ではないだろうか。

答 たしかにそれもある。若い世代の感覚がない。いつまでたっても明治大正終戦前の古いものの感じ方しかないということもあるだろう。しかしダンスが流行すれば寺をダンスホールにしたり、僧侶が労働組合を造ろうとしたり、フランス文学が紹介されるとすぐそれに走ったり、そうすることが必要なことであろうか。

そうではない。時代の烈しい変転のすべてを、変転しない普遍の立場で受け取ってゆく。歴史的なものと、超歴史的なものとの一体の信管しんかん体解、そこにほんとうのお念仏の宗教がある。時代の流れを流れてゆく、それは流転でしかない。時代の流れに無関心に人生と遊離した極楽参りを望む人を笑うと共に、時代に迎合して、願生浄土、往生浄土といえれば感覚が古いように思うて捨ててしまうのも違う。人生の具体的な生活の中に真の願生浄土の道がある。願生の信の智慧のみがほんとうの人生の受け取り方をするであろう。だから、若い感覚ということも、年令にはよらない。やはり信心の智慧の問題にもどってくると思われる。

問 宗教と対建性をどう思うか。

答 宗教ほど対建性の垢のつきやすいものはない。新聞を見ると、本願寺に対して軍政部から宗門の対建性を指摘され、堂班廃止の問題が出されたとあった。御同朋御同行の宗門、墨染の衣より身にせられなかった親鸞聖人の宗教に、今日までこんなことがあったのが不可解のようですが、中外日報などで論破された位では眼がさめず、敗戦という高価な代価を払って、おまけに進駐軍にいられないと、落ちてこないほど堅い垢である。しかし悪くすると、対建性をこわすと何もなくなる場合がある。

真の伝統とは、この対建性をやすりで落した後に光るもの、そのものだけが真の宗教である。即ち真実の教行信証の流れ、信のいのちの流れだけが正しい伝統なのである。私たちは謙虚に、しかし生命を打ち込んで、この名号の御いのちの流れに帰入しなければならぬ。この問題も、つまりは信心の智慧が解決する。今まででも信心の人はあまり堂班競争などしなかった。

問 左翼のある人は、宗教に生きる者は、人生の逃避者だというがどうだろうか。

答 さあ、どちらが人生の逃避者であろうか。われわれもまた人生の苦悩を逃避したり、自暴自棄したりしない生き方が宗教であると信じている。その宗教生活が逃避だと思われるのは、鬭争的でないからであるまいか。鬭争的であることが人生への真の随順であり、宗教的信に生きることが人生からの逃避だとは思われない。宗教は人間を本来の人間につれかえり、自然法爾の生き方、正直な生き方にあらしめるのであって、人生からの逃避ではない。人生への随順であり、反人生ではなくて、人生を超えしめるものである。もし願生浄土の宗教をもつて、この世ならぬ彼岸の浄土へ生れようとするが故に人生からの逃避だというならば、それは浄土の宗教を知らぬものである。人生をもつて旅路と考え、一筋の白道をお浄土まで歩もうとすることは、人生の実相を正しく領解するからである。人生は何人にとつても旅路である。厳肅なる旅路であつて、執着して享樂の場所とすべき処ではない。昔から真劍に生きた人たちにとつては、人生は度^{わた}つてゆかねばならぬ旅路であつたのだ。誰にも彼にもやがて死が来る――。

問 その死だ。死ぬることなど考えるから、どうしても消極的になり易いのじゃないか。

答 そうかも知れぬ。しかしそれもやむを得ない。私はしかしこう思う。「もつと人間がみな死を考えて消極的になつたら、この世ももう少しは生き易いところになりはしないか」と。氣負いこんですること為すことがみな、名利煩惱の仕事であつて、積極的にやる人間が一番人を苦しめる人ではないか。人間のすることは、よいことがそのまま悪いことである。人は死とつくんで生きる時、はじめて偽らざる生き方、ほんとうのものを求めてくるのではあるまいか。私はもつともつと、消極的な生き方、内が空虚なままで外へ積極的である生き方より、外へ消極的で内へ積極的に生きる生き方、即ち、内蔵為本の生き方に徹すべきだと思う。人間から反省とか、内観とか、謙虚な生き方を取り去つたら人間ほど恐るべきものはあるまい。そしてそれを今の世は証明している。もつともつと内に内に、そして一步一步静かに生きて行こう。

問 しかし宗教はあまりに人生を主観的に考えすぎはしないか。社会運動、経済問題等によつて、まず社会から改造しなければ人生問題の解決はないのじゃないか。

答 そういうことも必要である。しかしそれと宗教とは問題の次元が違うのだ。何思想、何運動、何社会であろうと、たとい人生における種の問題をどうにかすることができたとしても、それで人生そのものが解決したのではない。宗教は人間の努力や精神力や運動や等々によつては、どうすることもできない人生の苦悩の中から生れてくるものであり、その人生それ自体を説明しようとするものなのである。自分らの主義や思想で、人生そのものが全部解決できるなどと考えるのは愚かなる高慢でしかない。宗教の要らないような社会を造つて見せるなどと考えている人があるとならば、それはよほど狂信的思想の持主であろう。

人間には、相対的なものの取り扱いは許されても、絶対的な解決をする力は与えられない。見てごらん、人類の動きを。はてしない鬭争を理論づけまでしてやっている

ではないか。親鸞聖人の「生死の苦海ほとりなし、久しく沈める我等……」の仰せを裏付けするかの如く。かくして宗教は人間の本質的な苦悩がある限り無くならないであろう。